

平成 21 年度大学院修了式における学長式辞（平成 22 年 3 月 24 日）

今年は桜の開花が早く、大久保キャンパスの桜も蕾を開き始めました。本日はあいにく雨ですが、その水の恵みを受けて、数日中には満開を迎えることができるでしょう。こうした中 2009 年度（平成 21 年度）の埼玉大学大学院修了式を挙行できますことを、私はここに集われた皆さんと一緒に喜びたいと思います。

本日、大学院の課程を修了し、修士の学位を得た人は 408 名、博士の学位を得た人は 48 名であります。このなかには、祖国を離れて埼玉大学で研究に励んできた留学生が、修士・博士合わせて 69 名含まれております。また、大学院課程の修了生以外に、学位論文を本学大学院に提出して論文審査に合格し、博士の学位をえられた方が 3 名います。私は埼玉大学を代表し、皆さんに心からお祝いを申し上げます。また、今日まで修了生の皆さんの研究を支えてこられたご家族の方々に対しましても、そのご労苦に敬意を表するとともに、心からお祝いを申し上げたいと存じます。

さて、埼玉大学は昨年 1 年をかけて、創立 60 周年を祝いました。本学は、1949 年（昭和 24 年）5 月に、旧制浦和高等学校を母体とする文理学部と、埼玉師範学校及び埼玉青年師範学校を母体にした教育学部という、2 学部体制の新制国立大学としてスタートしたのです。

振り返りますと、そのころの日本は、なお敗戦後の混乱期にあつて、方々に焼け跡が残り、食糧難も続いていました。また、下山事件、三鷹事件、松川事件が次々に発生し、社会不安が極限にまで達していました。そうした中で、高等教育を受ける機会を国民に広く開放するという意図の下に行われた新制国立大学の設置は、数少ない明るい出来事でした。1949 年には、もう一つ、明るいニュースがありました。湯川秀樹博士が日本人として初めてノーベル賞を受賞したことです。新しくスタートした埼玉大学では「真理の探究」が合言葉になっていましたが、教職員も学生もこのニュースに大いに勇気づけられたに違いありません。

それから 60 年。時代は変わり、日本は大きく発展しました。埼玉大学も、教養学部、教育学部、経済学部、理学部、工学部という 5 学部と、文化科学研究科、教育学研究科、経済科学研究科、理工学研究科という大学院 4 研究科を擁する総合大学へと発展してきました。その埼玉大学大学院を目指して、皆さんのように研究を志す有意の人たちが、日本全国から、さらには世界各国から集まり、毎年 450 人ほどの人が修士あるいは博士の学位を得て巣立っていくようになったのです。

戦後日本を発展に導いた原動力の一つは、科学と技術にあります。そして、たくさんの方が大学院を目指すようになったのは、21 世紀社会がしばしば知識基盤社会といわれることに示されるように、社会と人々の生活にとって「知」の持つ意味が格段に大きくなってきたからに他なりません。それだけに、今後もさまざまな場で科学研究や技術開発に携わっていかうとされている皆さんに対し、ぜひお話しておきたいこと二つがあります。その一つは、創造的な研究についてであります。

科学の発展が専門分化と表裏一体に進んできたことは、皆さんもご承知の通りです。古

い数字は把握していませんが、日本学術会議への登録学協会の数を見ますと、1981年から2009年の間に1003から1760へと増加しています。皆さんは、このように細かく分化し、精緻化した専門領域の中で研究をしてきたわけですが、私が言いたいのは、自分の研究が立脚する狭い専門領域の価値に囚われていては、真に創造的な発見は望みがたいということです。ではどうするか。このことについて、一昨年ノーベル物理学賞を受賞された益川敏英さんが示唆的なことを言っています（『益川流「のりしろ」思考』扶桑社）。

「新しい理論は何もない“無”から突然に生まれることは絶対にありません。・・・創造するには「材料」をきちっと持っていないとだめです。その材料は多いにこしたことはありません。だから「雑学」がとても重要になってきます。・・・いろんなものに興味をもって、たくさんの情報や知識を常に頭に入れておく。それが創造力の「源泉」になるのです。」

益川さんの言う「雑学」を、自己流の読み方を加えまして、私は、次のように言いたいと思います。それは、狭い専門領域の枠から抜け出して、自分の専門的知見を相対化するためには、広く目配りし他の専門領域の高度な知識、情報を常に頭に入れる努力を怠らないことが大事である、ということです。これが他ならぬ「教養」を身につけるという意味だと私は思うのです。これは、言うは易く、行うは難し、の典型的な例であって、なかなか大変なことだと思いますが、皆さんには是非このことを心がけて頂きたいと希望します。

私は、このように言いながら、私たちの世代が流行に後れるなどばかりに読んだ、カール・マルクスの『資本論』を今思い出しています。マルクスはシェイクスピアの全戯曲に精通していて、それが『資本論』の記述に見事に活かされていたのです。

ところで、科学と技術が発達すると、研究者の社会的責任が問題となります。私が皆さんにお話ししたい二つめは、このことについてであります。

そこで、ごく大雑把に科学の歴史を振り返りますと、近代科学が誕生した17世紀においては、自然科学も、人文、社会科学も、価値の問題を知の営みから分離して、純粋に客観的な立場から「あるもの」を認識し、原理原則や法則を明らかにすることを目指すものでした。しかし、その後、とくに19世紀・20世紀になると、科学技術は現に「あるもの」を変えざるを得ないものとして発展し、自然と人類社会に大きな影響を与え、産業・経済、医療・福祉、政治制度等の領域において、人々の暮らしと社会の基盤を支えることに貢献してきました。医療と公衆衛生、医学の進歩がもたらした難病克服、人間の寿命延長、物質的豊かさに支えられた便利で快適な生活等々、科学技術の発達が人類社会にもたらした恩恵は、計り知れないものがあります。

しかし、反面、科学技術は、その発展によって人々に恐怖や不安を抱かせる側面も出てきました。広島、長崎に投下された原子爆弾は、20世紀初頭の科学の成果である相対性理論、量子理論に基づく兵器です。また、地球温暖化や生態系の危機、貧富の格差の増大、水と食料の分配の不均衡など、いま私たちが直面している地球規模の問題も、科学、技術の発展がもたらした結果の無視できない負の側面と言わなければなりません。

同じことは、社会科学の領域でも、言えることです。一つだけ例を挙げましょう。金融工学です。金融工学は金融経済学に新風を吹き込みましたが、金融工学を利用して作り出された金融商品は、経済を攪乱させることにもなりました。一昨年の世界的な経済危機の契機となったサブプライムローン問題は、その象徴です。

21世紀の今日、科学と技術は、あるものを認識する段階、あるものを変化させる段階から、これまでなかったものを意図的に創造できる段階に入ってきました。その典型は生命科学であり、生命の仕組みの解明と操作技術の開発が進んでいます。ゲノム科学から遺伝子操作技術、生殖発生生物学から胚操作技術、脳科学から高次脳解析技術が発展しており、これらは人類の未来に新しい可能性を開く半面、人間存在の根底に係わる問題を提起しています。そのことから科学・学問そのものに限界を設けるべきではないか、という論議さえ出ています。科学技術は価値の問題に関係しない中立的・客観的なものである、という17世紀的な想定はもはや成り立たなくなっているのです。

1905年に特殊相対性理論をつくり、それが原爆開発の元になってしまったアインシュタインは、死の直前に「もし私があのヒロシマとナガサキのことを予見していたなら、1905年の公式を破棄していただろう」と言ったと伝えられています。研究者にとってアインシュタインのように反省しなければならないことほど不幸なことはありません。

日本学術会議は、科学や技術が社会に与えるデメリットの発生を抑制する社会的システムの構築の必要性を唱えています。研究者各人も社会に対する「説明責任」が求められます。そのためにも、皆さんには、狭い専門領域の枠内に閉じこもっているのではなく、研究の結果が社会に与えるかもしれないメリット、デメリットを絶えず点検していただきたいのです。その場合にもものをいうのは、「どうも不安だ」という感受性です。その感受性を支えるのが、先ほどお話しした「教養」なのです。

皆さんのなかにはこれからも大学で研究に従事する人もいるでしょう。今日を一区切りにして企業や民間の研究所などに活動の場を移される方も多数います。また祖国に帰って、国のために働くという留学生もいるでしょう。いずれにせよ、皆さんはこれからも様々な現場で科学研究や技術開発に関わっていかれるに違いありません。折に触れ、私が今申し上げたことを思い出してください。

皆さん一人ひとりが大学院での研鑽の成果を十分に生かし、今後それぞれの立場でやりがい感と達成感に漲った人生を歩み、活躍されることを願って、私の祝辞とします。大学院を修了された皆さん、本日は本当におめでとうございます。

平成 22 年 3 月 24 日

埼玉大学長 上井喜彦